お茶壷道中

「週末寸言」原稿 20090718

大名行列といえば「下にー、下にー」の掛け声を発しながらしずしずと行進する一大歴史絵巻を連想する。「下にー」というぐらいで、行列と行き交う沿道の庶民は屈辱的な土下座を強いられたと、今では信じられているようだが、事実は違う。土下座を要求するのは、徳川御三家の参勤交代の折だけで、それ以外の大名に土下座は不要。道路の脇に寄って後ろ向きにじっとしていればよかったのだという。しかし、道路脇まで人があふれ退避する空間が無い場合には困ってしまう。

夏の風物詩隅田川の花火大会の夕方、「下にー、下にー」と黒山の人盛りの両国橋を渡ろうという殿様が、脇に寄れない仕事帰りのたがやと衝突。一戦交えて逆に首を切られてしまう落語「たがや」がその好例だ。殿様の首が落下するのを見ながら、群衆が「たーがーやー」と叫ぶ「落ち」は、花火を褒める「たーまーやー」の語呂合わせだが、権力者に向かう庶民の反感が良く伝わって痛快だ。

「ずいずいずっころばし／ごまみそずい／ちゃつぼにおわれて／トッピンシャン／ぬけたらドンドコショ／・・・」おなじみ日本古謡「ずいずいずっころばし」の出だしだ。御三家以外に、山城の国宇治のお茶を将軍に献上するために、茶葉を詰めたお茶壷が東海道を下る際に「下にー、下にー」の土下座を要求したらしい。これはそれを伝える歌だという。

お茶壷は大大名気取りで、土下座をしないものを容赦なく断罪したという。だから、沿道の民衆はお茶壷さまご一行を毛嫌いして、行列が近づいてくると「トッピンシャン」と戸締りして家の中にひっそりと隠れていた。そして、これが通りを「ぬけたら」「ドンドコショ」と出てきてアカンベーをしたというわけだ。

このお茶は土用休眠のために、その一部が甲州谷村勝山城の茶壷蔵に格納されたという。都留市は、この縁で観光用に再現したお茶壷道中祭をやっている。祭の観光客に土下座を強いて、「トッピンシャン」から「ドンドコショ」まで再現してみたら、客はどんな反応をするのだろう。